

「もう、こんな手いやだ」

ゆき子さんは左手のひじのところから義手（ぎしゅ）です。義手をはずすのがいやなので、おふろやさんへ行つたこともないし、友だちの家でお泊まりをしたりしたこともありません。ある日、ゆき子さんは次のような日記を書いてきました。

私は、一度やってみたくいことがあります。両手で物にふれてみたいんです。みんなは、「なに、それ。」と言うかもしれないけど私にとっては重大なことです。私は、まだ、両手で物をさわったゆめさえ見たことがないのです。

私が一番いやなことは、みんなの前で手をはずして「なに、あの人、手がかた方ないよ。近よらんとこう。」と言われることです。そんなことを毎日言われると、きっと私は学校に行きたくなくなると思います。

先生は、ゆき子さんのなやみをみんなにわかってもらいたいと思いましたが、そして、この日記をみんなの前で読みました。そのあと友だちが、次のような作文を書いてくれました。

私は、ゆきちゃんは、学校だったらあんなに元気なのに、日記を聞いて、本当は、すごくすごく苦労しているんだということがわかりました。だから、これからは、今よりずっとずっとゆきちゃんをおうえんして、はげましていきたいです。

このころから、みんなはゆき子さんのことを、おうえんしてくれるようになりました。

ゆき子さんの日記より

みんなありがとう。私は「もうこんな手いやだ。」ってないことも何回もありました。その時は、手がいたかったということもあるけれど、一番心で思っていたことは、「どうして自分だけこんな手なの？ どうしてみんなといっしょじゃないの？ いつもいつもみんなばっかりずるいよ！」っていう心が大きかったです。

でも、私はくじけたくないです。だって私のまわりには、こんなにすてきな人がたくさんいるんですから。いつもなかよしでいてくれる人、なやんでいたら、かならずなくさめてくれたり、相談にのってくれくれる人もいます。その人たちの顔を頭の中で思いうかべると、なんだかうれしくなります。「もうこんな手いやだ。」なんて思いたくないで

す。気持ちのいいすつきりした心で、強く生きていきたいです。

こう思い始めたゆき子さんは義手はずして町の中へ出かけるようになりました。児童館へ行ったときのことをゆき子さんは、次のように日記に書いてきました。

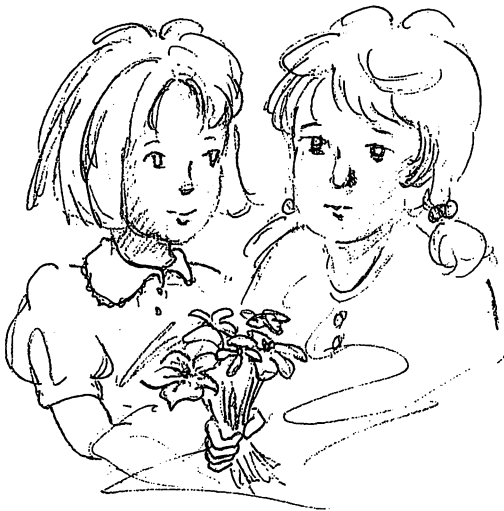
児童館に行くことにしました。かよちゃん「ゆきちゃん、手どうすれん。」と言いました。私は、すぐに「いいの。私が手はずして、児童館にいる人がどんなふう私を見るか、たしかめてみたいもん。」と言いました。たくさん人がいたので、少しきんちようしました。

読書室に行きました。「かくしちやだめ。」と思って、そこにしばらくいました。だいたいの子が私に注目しているのに気がついて、こわくてこわくてにげだしたくなりました。心ぞうがドッキンドッキンはげしくなってきました。今度来るときは、こわがらずどうどうと遊べるようにしようと思いました。

このようにして友だちの前でも義手はずせるようになったゆき子さんは、二月の合宿にも参

加し、みんなといっしょにお風呂にも入りました。そして、一年をふりかえって次のように書きました。

私は、一ばんいんしょうてきだったのは、みんなと仲よくこの一年活動できたことです。例えば、てつぼう、なわとび、とびばこなど、私のできなかつたことをどんどん自分のものにしていけたからです。これもみんなや先生のおかげです。ありがとう。もし、だれもおうえんしてくれなくて、だれ一人協力してくれなかつたら、私はきつと弱くて暗くて友達も一人もいなかつたかもしれないのです。



「もう、こんな手いやだ」 (小学校高学年向け)

A 教材設定の意図

最近出生前診断という言葉がはやっている。医学の発達によって、妊娠中に胎児の障害や病気を診断する技術が確立しつつある。しかし、胎児の障害や病気を知ることにより、親は己の障害者観を問われることになる。

つまり、障害を持つことは不幸なことだという障害者観をもつていれば、それは妊娠中絶という結果に至るからである。しかし本当の不幸は、障害を持つことを不幸だと思う人間の中で生きていくことであり、また、多くの人が「障害は克服すべきもの」と思い込まれていることである。言い換えれば、障害者に対する差別は、障害者を取り巻くまわりの人間が生み出していることに、私たちは気づかなければならない。

そして障害を持つ人がこの社会で生きていくことを、励ましたり、支えたりということは、単に日常生活の不便なところをカバーすることではないということに気づきたい。

まわりの人間が障害を持った者の生きにくさや、つらい思いをうけとめ、共感して、自分のこととして考え始めたとき、そこは障害者にとって住みやすい社会となる。

こうした、つらさや深い思いに共感する関係をつくり出すことが、人権教育における「仲間づくり」の課題である。それは障害を持つ者に対してだけでなく、いろいろな厳しい状況におかれている子どもを中心にすえてなされるべき取り組みなので

ある。互いに支え合う真の仲間が作られていく中で、ありのままの自分で生きるといふ生き方が可能となってくる。

B 教材の解説

本教材は、小学校四年の学級での取り組みを元にして、左手肘部分より義手をつけているゆき子は、自分のことは自分でやり、どうしてもできないことは友達に遠慮せず手伝ってもらっていた。しかし内心では、みんなから「手がかた方ないよ。」などと言われることを一番気にしており、友達に義手をはずしたところを見せたたくないという気持ちをもっていた。

ある日プールを見学していたゆき子に向かって、男子生徒が「おまえ、だいこんとまちがえて切ってる。」とか「おまえの手、やけどしてないんやろ。」と、心ない言葉をかけるというショッキングな出来事が起きた。

この機会を逃してはならないと感じた担任は、ゆき子が心の奥にしまっていた思いを、まわりの子どもたちにていねいに伝えることにした。そして子どもたちは、ゆき子の思いに応えるように作文を書いていく。

私は、ゆきちゃん、学校だったらあんなに元気なのに、日記を聞いて、本当は、すごくすごく苦勞しているんだということがわかりました。だから、これからは、今よ

りずつとずつとゆきちゃんをおうえんして、はげましてくきたいです。

そうした、学級の子どもたちの作文や担任の取り組みが、障害を隠すことなく、ありのままの自分で生きようとゆき子を励ます。

義手はずして出かける範囲が広がったゆき子は、ある日児童館へ行く。さすがに子どもたちの多い児童館では心臓がドッキングする。このときのことについて、実践ではまわりの子どもは次のような作文を書いてきている。

私は、ゆき子さんが、手にはめているものをはずしてきてもいいと思います。私はゆき子さんがへんなことをされたら「なんでそんなこと言うの。ゆき子さんは、取ろうか取らないかまよっていたけど、自分で取ってこようと取って取ってきてんよ。自分かもしゆき子さんだったら、そんなこと言われてもいいんか。」と私はぜつたい言ってゆき子さんを守ると思います。

このあとゆき子は合宿にも参加し、五年生になってプールにも入るようになった。このようにゆき子が力強く前へ歩み始めたのは、まわりの子どもたちの支えと励ましがあつたからであることは言うまでもない。

C 指導上の留意点

・授業のまとめでは、教師自身の経験などを話したりもしながら、出しやすい雰囲気をつくってほしい。

D 参考

・第四次（一九九三年度）全国教研人権教育分科会報告

「強く生きるA子さん」

高林利幸（小松市立符津小学校：当時）

本教材を使った授業から

◆「かわいそう」という感想が多い中「『なにあの人、手がかた方ないよ。近よらんとこう』と言われたことがかわいそう」と発言してくれた子がいた。それをきっかけにして、「かわいそうとか同情する目で見ないで、普通の人と同じように見たい」という意見が出され、その意見にみんながハツとし、気づきが見られたように思う。（石川）

◆導入で「義手って知ってる？」と投げかけたら、「こわい」「いやだー」という声もあがり、初めて手のない人を見た反応としては仕方ないことでもあるが、資料の「ゆき子さんのいやがる行動」と同じ行動をした。そのため資料に入りやすく、相手の気持ちになつて考えることの大切さに気づいた子が多かつたようだ。（珠洲）

◆自分の中のつらい部分、隠したい部分をパツと外へ出すときの勇氣は、周囲に真の理解があると分かつたときに出せるのだと思う。「自分の中の劣等感、隠しておきたい部分……」という話をしたとき、何人かの生徒の表情に変化が見られた。隠さないで気楽に生きていけるクラスや学校にしたいと常々思うのだが……実際、自分は語れないことがある。（加賀江沼）

E 展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① 義手や義足というものを知っていますか。</p> <p>二 展開</p> <p>② 「もう、こんな手いやだ」を読みましよう。</p> <p>③ ゆき子さんの一度やってみたいことは何ですか。また、一番いやなことは何ですか。</p> <p>④ ゆき子さんが自分の手のことをいやだと思わなくなったのはなぜでしょうか。</p> <p>⑤ 児童館で心臓がドッキンドッキンしたときの気持ちを考えましよう。</p> <p>⑥ ゆき子さんが、それまでできなかったことをどんどん自分のものにしていったのは、どうしてでしょう。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑦ あなたも、いやだと思っていること、不安に思っていることなどがあれば、ゆき子さんのように先生に言ってみるに聞いてもらいませんか。</p>	<p>① 手足を失っている人についての印象を率直に出させる。</p> <p>② ゆき子さんとまわりの子どもたちとのやりとりをおさえながら読ませたい。</p> <p>③ 一見明るくふるまっている中にも、義手をはずしたときに自分の手について言われることをいちばん恐れている。なぜそのことが怖いのかも話し合わせたい。</p> <p>④ 自分の気持ちを出せて、それをまわりの子どもたちが受けとめて返してくれたからだということに気づかせる。</p> <p>⑤ 絶えず不安がつきまとうておさえる。そして、それもまわりに友だちがいて乗り越えていることに気づかせたい。</p> <p>⑥ いちばん恐れていることをみんなにいうことができ、それに応えてくれる友だちがいたことが、ゆき子さんをもっとも勇気づけたのだとおさえる。</p> <p>⑦ いちばん出しやすい形で表現させたい。出てきた話については、きちんと受けとめるために感想を書かせ、次の指導につなげてほしい。</p>